

問いを生み出す 中学歴史教科書

— 改訂版に寄せて

「学ぶ会」副代表 山田 麗子



● より学びやすい教科書をめざして

2015 年、学び舎中学歴史教科書は検定に合格し、翌年から、採択校での使用が始まった。それから 4 年間、私たちは教科書の内容を深め、より多くの子どもたちにとって学びやすいものにするための取り組みを重ねてきた。

その一つが、地図やグラフをカラーバリエーションにすることだった。色覚特性をもつ人の色の見分けにくさを体験できるメガネをかけて、すべての地図やグラフを点検して色やマーク、線のスタイルなどを変えた。編集担当はみな教員経験者なので、「この発問をしたら、さまざまな色覚特性をもつ生徒が読み取れるだろうか」などと話し合いながら実証し、変えていった。

そのころ、ランドセルや通学カバンが重く、子どもの負担になっていることが報道され、社会問題となっていた。これに対しては、用紙の重量の研究を始めた。また、内容の精選を図り、本編はテーマを統合して 113 テーマとし、年表などもページを縮小した。しかし、内容はむしろ濃く、わかりやすくなったと自負している。このような内容と用紙の見直しの結果、教科書の重さを 20% 以上軽くすることができた。

● 人びとの姿や 社会の課題が見える図版

「学び舎の教科書には今まで見たことがない写真が載っている」という言葉をいただってきた。執筆者が授業のために探した写真から、手ごたえのあったものを厳選したためである。特に 2 ページの冒頭に置いたメインの図版は、発見や疑問がたくさん出るようなものにしてきた。改訂版でも、さらに子どもの関心を喚起する図版になるように、授業を想定して見直しをした。

一例として、第 3 章 (3) 「荘園の人びと」のメイン図版『粉河寺縁起絵巻』をあげる。この絵巻は、よく教科書に掲載されるものだが、改訂版では、「年貢 (公事) を納める人たち」の場面を大きくして、長唐櫃の中のものや差し出しているものが何かを予想できるようにした。絵の人びとの表情もわかるようにし、生徒に貧富さまざまな人たちがそれぞれ何を言っているか、思っているかを想像させる活動ができるようにした。

さらに左下の年貢を納める場面を見ている男性に注目させたい。この男性は、年貢を納める場面をどのような思いで見ているだろうか。一般的には、この部分は省かれることが多いが、

教科書 p.60 「荘園の人びと」

これを入れることで、荘官の執事の前の姿だけでなく、さまざまな人びとの心情を想像することができる。保元・平治の乱の後、領主のより強い従属の下に置かれるようになった地域社会の様相がうかがえる。

このように図版を観察することで、当時の人びとの姿や社会の課題が浮かびあがり、その時代への関心が高まることを期待した。

● 主体的な学習を育む記述

子どもが主体的に学ぶ学習は、長く歴史教育の課題だった。中学の地理や公民と比べても、歴史の授業は教師の説明が中心になりやすく、語句の暗記に陥りやすい。学び舎教科書の執筆者たちもこうした悩みを抱えながら、子どもた

ちが目を輝かせる授業づくりを追求してきた。

子どもたちが身をのりだして何か言いたくなる、わが身にひきつけて考えてしまう、歴史と今のつながりが見えてくる、そのような授業づくり研究の長年の蓄積と、何度にもわたる討論の中から、学び舎教科書は生まれた。

改訂版でも、疑問や問いを引きだし、時代のイメージを描けるように記述の再検討を行った。一例として第 1 章 (3) 「ピラミッドの謎」をあげる。巨大なピラミッドをどのように造ったのか、王と王に従う人びとの生活はどのようなものだったのか、ピラミッドは子どもたちの興味が尽きない題材だ。改訂版では、歴史研究に学び、古代の人びとをより身近に感じる内容を入れた。

具体的には、ピラミッド建設に携わった人びとが住んだ都市のようすや専門分野に分かれた



① 年貢を納める人たち (『粉河寺縁起絵巻』粉河寺蔵)

(3) 荘園の人びと — 院の荘園と平氏 —

農民たちが荘官の館に年貢を運んでいる。荘園はどのように広がっていったのか。

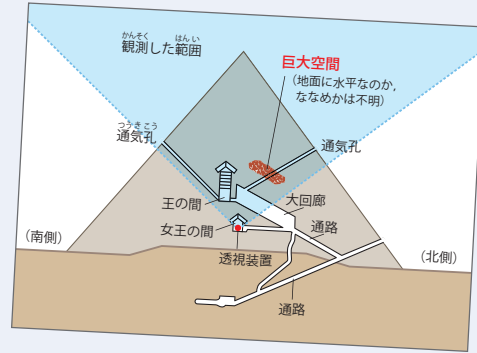
■ 年貢を運ぶ人たち

12 世紀につくられた『粉河寺縁起絵巻』には、荘官の館に、年貢を運ぶ人たちがえがかれています。荘園領主の貴族や寺社は、田畠を開墾

エジプトを支配するようになりました。5200 年ほど前（紀元前 3200 年ごろ）、エジプト王国が成立しました。ゆたかな実りによって、自分で食料を生産しなくても生活できる人たちが、登場したのです。

— ピラミッド内部に未知の巨大な空間 —

クフ王の大ピラミッドの内部には、王の間やそこにつながる大回廊、女王の間などの空間がある。名古屋大学などが参加する国際研究チームが、それ以外にも空間があるのではないかと期待して、それを画像で映し出せないかと研究をすすめた。研究チームは、宇宙線のミュー粒子で透視する装置を使った。宇宙からふり注ぐミュー粒子は、厚さ 100m 以上の岩盤も透視することができる。2017 年、未知の巨大空間を映し出すことに成功した。長さは 30m 以上あるとみられる。このように、物理学や工学の専門家たちも、ピラミッドのなぞを解くために活躍している。



⑥象形文字の解読の手がかりとなった王の名まえ／フランスの学者シャンポリオンが1822年、エジプトのロゼッタで発見された石の文字を手がかりに解読に成功した。

017

労働、支給された食事などについて記述した。また、側注には、古代エジプトの人びとの手紙や役人になるための教科書を載せて、当時の人びとの価値観に触れることができるようにした。さらに囲みには、2017 年、名古屋大学などの国際研究チームが、最先端の透視装置を使って、ピラミッド内部に未知の巨大な空間を発見したことを紹介した。物理学や工学などの専門家もピラミッドの謎に迫っている。さまざまな分野に関心をもつ中学生の学ぶ意欲を高めることができるように紙面を工夫した。

● 学び、考え、行動する子どもたち

具志堅隆松さんは、沖縄戦で亡くなった人たちの遺骨を収集する活動が続けてきた。改訂版の冒頭のページ「6 月 23 日、沖縄で」には、具志堅さんの活動に参加した高校生が登場する。土を払って骨を集めた高校生は、「戦争は終わっていない」と感想を述べている。

具志堅さんは「小学生が発掘現場に来てくれたことが嬉しかった」と語っている。その写真も改訂版に載せた。一般的には、小学生が人の骨に接するのは難しいと考えられがちだ。しか

し、小学生は「遺骨の人の名まえはわからないのですか」と質問した。小学生は、遺骨の人の在りし日の人生に思いを寄せたのである。このように歴史と出会い、過去のできごとを想像する力こそが、歴史学習の源となるだろう。

教科書には多くの子どもが登場する。働く子ども、育ちにくかった子ども、戦火の中の子ども。中学生は、歴史の中の子どもの姿に接して、親近感をもって学ぶことができる。また、各時代の学校教育のようすや教科書の内容からは、国家や社会がどのような方向に向かっていったかに気づくことができるだろう。

戦後では、食糧メーデーや子供議会などで発言、行動する子どもたちを描いたが、改訂版では、核廃絶を目指して署名活動が続ける高校生、不当なアルバイトに泣き寝入りせずに労働組合を結成した高校生たちについて新たに記載した。

第 10 章の扉では、社会の課題に取り組む世界の子どもたちを取り上げた。銃の規制を全米に訴える行動の先頭に立ったエマ＝ゴンザレスさんや、高校生で市議会議員になったデンマークのラッセ＝H＝ピーダセンさんなどである。日本でも 18 歳選挙権が実現した。子どもを主権者として、学ぶ力を尊重した教育が求められている。

● 人びとの姿から戦争と平和を学ぶ

1920 年代から、1945 年までの第 9 章「第二次世界大戦の時代」には多くのページをあてている。戦争の学習は生徒に衝撃を与え問題意識を呼び起こす。一方で、戦争は生徒の日常から遠く、目を背けたい生徒も少なくない。しかし、体験者の証言や人びとの姿には、生徒を引きつける力がある。教科書には、戦争証言や人びとの姿を多く入れてきた。改訂版では、第 9 章(11)「餓死、玉砕、特攻隊」で、特攻出撃した少年飛行兵・荒木幸雄を新たにに取り上げた。

戦局の悪化の中、幸雄たち少年飛行兵は基礎教育を省かれ、一日も早く戦地に行くための訓練を受けた。航空技術者になる夢をもっていた幸雄は、17 歳で、沖縄に出撃し特攻死した。出撃前に子犬を抱く幸雄のあどけない表情から、生徒たちは何を感じるだろうか。人びとの姿を通した戦争学習は、なぜこのようなことが起きたのかという思いを生徒に呼び起こさせ、さまざまな疑問や問いを生み出すことだろう。

教科書では、世界情勢と戦争の経過を縦系に、人びとの姿や証言を横系にして、戦争の時代を描いた。生徒が、戦争を生み出す社会や経済、

くり返し、玉砕しました。約 1 万人の日本人住民やサイパン島民も、これに巻き込まれて死亡しました。

5 弾薬も食料もなくなり、戦う力を失ったときは、降伏する（捕虜になる）道があります。しかし、日本軍は捕虜となることを禁じていたため、残されたのは玉砕だけで、司令官は「総員玉砕せよ」と命令しました。

■ 爆弾を抱えて体当たり——特攻隊

1944 年から、日本軍は、戦闘機が爆弾を抱え、パイロットもろとも米軍の航空母艦などに体当たりする戦法をとりました（特別攻撃隊）。

10 この特攻隊員は志願という形をとりましたが、上官などから志願を強く求められた隊員も多くいました。特攻隊は、約 3000 機がアメリカ艦隊めがけて出撃しましたが、米軍のレーダーにとらえられ、多くは撃墜されました。特攻隊の戦死者は、4000 人にのぼりました。

しかし、新聞などでは、特攻隊は国のために若い命をささげるものとして、体当たりで生命を犠牲にすること自体がたたえられました。

— 特攻機で沖縄に出撃した少年飛行兵 —

荒木幸雄は、大空にあこがれる運動の得意な少年だった。1943 年、15 歳になったとき、東京陸軍少年飛行兵学校に出願し、合格した。しかし、1 年間の基礎教育を省かれ、そのまま操縦を学ぶ上級学校へ行かされた。幸雄たちは、一日も早く戦地に行くために訓練を受けた。幸雄は訓練中、空を見上げながら一度だけ仲間にはづりと言った。「できたら、工業専門学校に行って航空技術者になりたいんだ」。

幸雄は、1 年間の上級学校教育を終えて少年飛行兵となり、平壤にある飛行部隊で襲撃機の操縦訓練を受けた。そして、1945 年 5 月 27 日、17 歳 2 カ月で、襲撃機を改造し翼下に 250 キロ爆弾をつるした特攻機に乗り、万世基地（鹿児島県）から沖縄に出撃した。幸雄たち第 72 振武隊の少年飛行兵は、初出撃が特攻だった。



⑤撃墜されて墜落していく特攻機



⑥出撃前、子犬を抱く幸雄と少年飛行兵たち（朝日新聞社提供）

『ともに学ぶ人間の歴史』 に込められたもの

政治のしくみについて考えを深め、現在の日本と世界を見る力を培ってほしいと考えている。

● 多様な人びとの思いを重ね合わせる

今日、世界では、ナショナリズムが強まり、緊張が高まっている。東アジアの歴史認識問題も解決に向かっていない。こうした中、多様な人びとの思いを重ね合わせて、広い視野で歴史を学ぶことがますます大切になっている。

学び舎教科書は世界史を広く扱い、中国や朝鮮・韓国など東アジアに多くのページをあてた。北海道、沖縄の視点を充実させ、さまざまな地

域で独自の生活や文化があった事実を記述している。先住民も歴史の主体として登場する。

一方、2019年の日本の男女格差指数は153カ国中121位（WEF）と低く、依然として男女平等が進んでいないことを示している。差別の壁は就職、職場、家庭のあり方など、さまざまな面で子どもたちの未来に立ちふさがっている。女性が生きづらい社会は、人が個人として尊重されない社会である。学び舎教科書は、女性を歴史の主体として、その働き、学びと創造、たたかいや運動などを多くのページに記載した。

教室の生徒たちが、『ともに学ぶ人間の歴史』をとともに学ぶ中で、個人として尊重しあえる社会について考えを深めることを願っている。 ■

■ ワクワク、どきどき、歴史と出会う

中学校の歴史学習のスタート。歴史を学ぶ楽しさを広げる。こんなことがあった！なぜ？どうして？から出発。

■ 時代に生きる人びとの姿を読みとる

歴史は、たくさんの人びとによって作られる。その名まえの多くは、記録を残さず、忘れ去られてしまったが。人びとの姿をとおして時代をイメージし、学習が始まる。

■ 民衆の声を、たたかいを、いきいきととらえる

新しい時代をひらこうとするとき、民衆は声をあげる。行動を起こす。その現場に立つてみるところから歴史学習は進む。

歴史の中の女性と 子どもに光を当てる

(3) 戦場は中国だった — 日露戦争 —

日露戦争の開戦

1904年2月8日、日本の海軍が、旅順港内のロシア艦隊を奇襲攻撃した。同じ日、陸軍は、朝鮮の仁川を占領した。これによって日露戦争が始まった。

■ 戦火に迫られる人びと

1904年の秋、満州（中国東北部）の奉天（現在の瀋陽）に、日露両軍に村を追われた人びとが、次々に逃げ込んできました。人びとは、寺院や人家の軒下などに身を隠して、戦火をしのいでいました。

教科書 p.188 「戦場は中国だった」



② 日露戦争の戦場

① 戦火で焼け出された人びと（中国東北部）

(12) 女性も太陽だった — 社会運動の広まり —

女性の権利

1907年に、小学校6年級を義務教育とした。小学校卒業後の進学率は、高等小学校2年、中学校（男子）5年、女子4年などがあった。1925年には15%近くになった。

■ 月のように生きたくはない

月のように生きたくはない。女性たちは、月のように生きることができませんでした。太陽である男性に従い、月のように生きることができませんでした。太陽である男性に従い、月のように生きることができませんでした。

(9) 戦争と二人の少女 — ヨーロッパの戦争 —

オランダにいた少女たち。オードリーはどんなことをしたか。アンネはどこへ連れていかれたか。

■ 隠れ家で日記を書く

「1942年9月28日：ぜったいに外に出られないこと、これがどれだけ息苦しいものか、とても言葉には表せません。でも、反面、見つかったら殺されるというのも、やはり恐ろしい。この日記を書いた少女はアンネ・フランク、オランダに住んでいたユダヤ人です。ドイツではヒトラーの政権の下で、ユダヤ人への迫害と差別が強められました。自由を移動すること、学ぶこと、仕事することをはじめ、人間として生きる権利を根こそぎ奪われました。そのため、アンネは家族とともに生まれ故郷のドイツを追われ、オランダに移住しました。しかし、ここもドイツ軍に占領され、ユダヤ人は、黄色いダビデの星のマークをつけることを強制されます。父親のオットーは、事務所に出られなくなり、アンネは学校に通えなくなりました。1942年7月、アンネの一家は、ほかのユダヤ人とともに、隠れ家で息をひそめて生活をす

■ ドイツに抵抗する連絡係

このころ同じオランダに、母親を助けて、ドイツ占領軍に対する抵抗運動（レジスタンス）に加わった少女がいました。この少女の名前は、オードリー・ヘプバーンです。オードリーの兄たち二人は、ドイツへの協力を拒んだために、収容所に入れられていました。叔父たちは捕まって、